



## ヨーロッパ三つの話

### 遠藤ミマン

#### 1 パリーで小野州一君に会う。

ロンドンからドーバー海峡を船でわたってパリーへ。バスがおくれたので、パリー着が夜の10時ころだった。予約していたレストランでは、あまり遅いので違約と思ったのか、食事の仕度を中止してしまい、交渉しても用意をしない。止むなく一同そちこちの食堂に入って、簡単な食事をしただけ。泊った宿が一つ星で(五つ星が最高とか)南京虫に食われた連中が出て、パリーはすっかり印象が悪くなっちゃった。東京を出て1週間目あたりが、一番いらいらすと言われていたが、ノイローゼ男がでて、一行にはぐれてしまったり、食事があわなくて肉体的に参ったり——丁度そんな時、パリーにあるTOKIOという日本料理を食べさせてくれるところに行って、米の飯や味噌汁を食べてほっとした。酒は白鶴で、1合700円、味噌汁おかわり200円、けっこう高いものだけれど、何せわれら日本人だ、日本食をたべて元気が出た。翌日またここで食べた。食事が終わって表に出て、友人の出を待っていた。すると突然、

「遠藤さんじゃないですか。」

と声をかけた日本人がいる。おかつぱ頭の背の低いがっちりした男性、ブルーのたてじまの入った白いシャツを着て、腕には花束と買物袋を下げている。よくよく見ると、小野州一君だ。びっくりして、「いつきたの。」と聞くと、「1ヶ月前」だということだった。これからニュースの方へいく予定とかだった。よもや、

知っている人に会うなどとは思ってもみなかった。ぼくは、持っていたピースを1ヶおみやげに進呈したら、長野県からきた一女性が4Bの鉛筆をプレゼントした。

なつかしかったね。

#### 2 ウィーンで池本君バンドに飛び入り。

ベートーベンが田園交響楽を作ったというウィーンの森を見物して、夕食は街の中のレストランに入った。両手をひろげたような、大きなこっぽのような固い肉を食べて出てくると、隣りのレストランから出てきた友人が、「バンド演奏をやっていてとても楽しかった」と言うと、池本君がそれを聞いてかけこんでいった。あとで聞くと、バンドに飛び入りをして、1曲やってきたそうである。翌日の夕食もまたここでということなので、ぼくらは今度まっ先にバンドのそばの席をとった。やってきたバンドの連中はいいお爺さん達であった。池本君は早速握手をした。ギターを持たせられた。そのギターにはネックが二つついている。彼は、「ツエー」とか「デー」とか始めの調子を打ち合わせると、あとは彼らのアコーディオンやヴァイオリンにあわせてじゃんじゃんひく。日本人のわれわれは、すっかり喜んだり涙ぐんだり、池本君はベースが本職だ。そのベースを持ってじゃんじゃんひく。いやあ もうほんとに楽しい一夜であった。

#### 3 ケルン寺院で一行にはぐれる。

ドイツのケルン寺院を見学したとき、ぼくは夾竹桃を前景にして大寺院をスケッチしていた。159mとかの高い高い寺院、ぼくは画用紙をたてにつないで、一生けん命描いていた。いざ描き終わって寺院前の集場所にいくと、誰もいない。サテはおかれたかと思った。大変なことになったと思った。次の行き先を記してある手帖もバスの中だ。その時ぼくは、一生ヨーロッパですごそうか。それともどうやって帰ろうか。先ずアムステルダムにいるという、国展の友人の所を尋ねようかな、などと考え、寺院の横の方へいくと、そこにはなんと、おいてきぼりを食った友人が2人いた。ぼくはその時ほっとしたけれど、その前までの、10分間位の孤独な感じは、未だに忘れない。池本君はぼくがいないと知って、汗を流して探し廻ったそうである。今もあの時の寂しさ、孤独さを思うと、ざわっとする。